

特集・都市の魅力—第三の都市空間①

# 第三の生活空間と都市の魅力

寺出 浩司

## —はじめに

もはや死語となってしまうが、銀座の街頭をブラつき歩くという意味の「銀ブラ」なる言葉が、新語として誕生し、そしてそれがまたたくうちに流行語として全国的に拡がっていったのは、日本の都市社会の近代化が本格的に進んでいった一九二〇年代のことであった。当時の風俗文献によっても、明治の東京にこの「銀ブラ」なる現象が認められなかったことは、風俗史家の生方敏郎の「日露戦争前後までの学生は、今日の学生のやうに、カフェの楽しみを銀ブラの味ひも知らなかった」（『明治大正見聞史』一九二六年）という記述からも確かめられる。

そして作家の広津和郎が「銀座と浅草」（『中央公論』二七年四月号）というエッセイの中で、「銀ブラといふ言葉は、今は東京人ばかりではなく、地方の人々にも、それが何を意味するか、直ぐ解るらしい」と言っているように、この言葉は都市生活の魅力を象徴するものとして、たちまちのうちに人々の心をとらえていった。

「モボ（モダン・ボーイ）」、「モガ（モダン・ガール）」という言葉でもって形容された当時の生活風俗の先端的現象が華やかに展開される銀座の街頭。都心のオフィス街丸の内に近接して、当時階層形成をはじめていたサラリーマン層やその予備軍である学生たちで賑わう銀座の街頭。そこをなんの目的もたずにそぞろ歩く

こと、砂糖にむらがり集まるアリのごとくに盛り場固有の甘い雰囲気求めて群れつどう人々の波に自分もまた匿名の群衆の一人としてまじりあうこと—それはまちがいになく近代の都市生活者のみに与えられた新しい体験であった。

この「銀ブラ」の誕生こそが、本号の特集テーマとなっている「都市の第三の生活空間」が日本においても本格的な形で成立したことを象徴的に示すものであったと言ってよい。そこで小稿では、この「銀ブラ」なる現象を手がかりとしながら、職場を中心とした第一の生活空間とも、家庭・地域社会を中心とした第二の生活空間とも異なった原理の上に成り立った、盛り場を中心とする第三の生活空間の問題について簡

- 一—はじめに
- 二—「銀ブラ」以前—異界としての盛り場
- 三—「銀ブラ」以後—第三の生活空間の成立
- 四—「銀ブラ」の魅力—匿名性と群れの本能
- 五—「銀ブラ」の調べ物—考現学という方法

単にデッサンしていきなさいと思う。

## 二——「銀ブラ」以前——異界としての盛り場

盛り場という言葉が日本で使われだすのは、幕末の頃だったと言われる。その起源は江戸時代の寺社の境内や遊廓・芝居街など人々の盛り場が見られた場所に求められるが、これが近代の都市計画によって再編されて、明治の盛り場が形成されてくる。たとえば、すでに江戸時代より浅草寺の門前町として、そして猿若町の歌舞伎三座、吉原遊廓で賑わってきた浅草は、明治十年代の都市再開発によって、「六区」の興行ゾーンを中心とした近代的な盛り場としての様相をもつようになってくる。また明治の大阪で最大の盛り場であった千日前は、江戸時代までは刑場・墓地であったが、墓地の阿倍野移転によって有閑地となり、地域活性化のために大阪市がここに見世物興行を誘致したことをきっかけとして、盛り場として発展をはじめている。

しかし、「銀ブラ」以前の盛り場を代表する明治東京の浅草も、明治大阪の千日前も、そこに群れつどう人々の生活構造という点からしても、また盛り場としての空間構造という点からしても、都市の第三の生活空間というように位置づけることはできない。

まずは明治の都市住民の生活構造の基本型が

いかなるものであったかを、日本の都市社会学の草分けの一人であった奥井復太郎の言葉、(「明治東京の性格——都市生活史についての覚悟」『三田学会雑誌』一九五三年)によりつつスケッチしておく。たしかに明治という時代は、政治・経済・軍事・教育などの社会制度の面では急激な近代化が押しすすめられた時代であった。

しかし、その都市社会を住民の生活のあり方から見れば、それは「末期にいたるまで、だいたいにおいて江戸の性格の延長ないし継続であった」。その代表的市民である「下町の商人と職人」たちの生活の特徴づけていたのは、労働・消費・娯楽の基本的な生活行動が、マチウチ(町内)と呼ばれる比較的狭い範囲の地域社会の内部で自己完結的に行われていたという点にある。

店持ちの商人や居職人の場合、家の表が労働の場所、家の奥が消費の場所というように、両者が同一の空間の内に融合されており、労働と消費、経営と家計とが未分化の状態に置かれていた。商人は地域住民の需要する日常的生活財・サービスを商い、職人は地域内の特定の顧客からの注文品を生産することによって、労働を介して地域社会と結びついていた。その裏面としての消費の側面から言えば、地域社会の内部で大体の生活財・サービスの購入が行われ、基礎

的な生活欲求がそこで充足されていた。レジャーについても事情は同様で、地域社会の内にそれぞれ娯楽中心地が形成され、落語・講談・浪花節などの寄席に代表される娯楽機関が、地域住民の嗜好にあわせて設置されていた。

このようにして地域社会の内部に「住居・職場・娯楽の生活三拠点を一カ所に統合せしめている事実」こそが、明治の都市生活の基本的な構造であった。小稿での言葉を用いて言い換えれば、当時の代表的市民であった都市自営業層の生活構造においては、第一、第二、第三の生活空間がまさしく未分化の状態にあったのである。

これが都市住民の日常生活の構造であったとするならば、これらの人々の群れつどってくる「銀ブラ」以前の盛り場は、民俗学者たちのいう「ハレ」の時空間にほかならなかったことになる。いまでも年寄りの職人が、月の第一日目のことを「おついたち」という美称で呼んでいることにもその痕跡が認められるように、一般に一日、十五日に定められた月の二日の休みはかれらにとっては「祭り」の日であり、その日に盛り場へ遊楽に出かけていくことは、平々凡々と繰り返される日常の生活から一時的に離脱していくことにほかならなかった。

そしてこのことと対応して、盛り場の空間構

造もまた、一種の「祝祭」、空間の色合いを濃厚に保有していた。たとえば盛り場としての浅草が、信仰（浅草寺）と性（吉原遊廓）と芝居（歌舞伎三座、明治以降は六区の興行街）の三位一体を基本骨格として成り立っていたことにも、それは如実にあらわれている。かつて職人たちの世界の隠語として、性行為を「おまつり」と呼び、また演劇あるいは芸能というものが本来的に祝祭的イベントであったことを思い起こしてもらえば、このことは了解しえよう。そして、そこがどれだけ人々によって賑わおうと、その周辺には墓地や穢れの空間が拡がり、そのうちには江戸時代の二大悪所とされた遊廓と芝居小屋とを包含するものであった。

このような意味において、「銀座」以前の盛り場は、その担い手となる都市住民の生活構造の面から見ても、その空間構造の面から見ても、異界性に彩られた都市の「周縁」的な存在にほかならなかつたのである。

### 三——「銀座」以後——第三の生活空間の成立

さて、以上にみてきたような都市住民の近世的な生活構造の基本型がくずれはじめ、そして盛り場も含みこんだ都市構造が大きく変容しはじめるのは、日露戦争後の産業構造の重化学工

業化に基礎づけられて近代産業社会の枠組みが本格的に形作られていった一九二〇年代前後の時代であった。この時期、工場労働者およびサラリーマンという近代的雇用労働者の階層形成が進展し、就業構造の上ではまだ少数グループではあったものの、かれらの形成しつつある生活文化が都市社会全体の生活文化のあり方を主導するようになる。奥井の言葉を再び借りれば、かれらが都市自営業層にかわって、「都市の代表的市民」の地位を獲得するようになってくる。

この雇用労働者層の生活構造を基本的に特徴づけるのは、労働と消費とが労働力の消費と再生産との循環的構造の下で、時間的にも空間的にも分離していくという点にある。時間から言えば、一日二十四時間の全体としての生活時間の中から、まずは企業によって拘束された労働時間が区切りとられることによって、それ以外の非労働時間の存在が浮かび上がってくる。そしてさらに戦後不況に対する企業の合理化政策の一環として採用されていった労働時間短縮によって増大した非労働時間の中から、生理的拘束からも一定程度解放された自由時間の存在が析出され、ここに、労働時間（社会的拘束時間）

、休養時間（生理的拘束時間）、そして自由時間の三つを基本要素とする生活時間の構造が成立してくることになる。

そしてこの雇用労働者の生活時間の構造にもとづきながら、都市の空間構造も大きな変容をみせていく。即ち、かつて地域社会の内部に「カ所に統合せしめられていた「住居・職場・娯楽の生活三拠点」は、労働空間が企業に、消費空間が家庭に、そしてレジャー空間が盛り場へというように分極化していく。こうして都市の中に三つの基本空間が形成され、盛り場は都市住民の日常生活の構造の中で第三の生活空間としての位置を獲得していくことになるのである。

当時の東京のサラリーマンたちにとっての第一の生活空間の代表地である丸の内に近接した銀座で、たとえば昼休みに、あるいは仕事帰りの夕方から夜の時間帯に、かれらのまさしく日常的レジャー行動として行われていく「銀座」が、第三の生活空間の誕生を象徴的に示すものだったと述べた由縁がここにある。

そして確かに、銀座は近代的な都市生活の魅力を体現したシンボリックな場所であった。そのことは、昭和戦前期の都市を舞台にした歌謡曲の中で、戦時になだれこむ寸前の都市生活の最後の輝きが、郊外の文化住宅で営まれたモダンライフと、銀座でのレジャー行動の二つに代表されて歌われていたことからもうかがわれる（一九二八年から三七年までに発表された代表的作品として、「当世銀座節」「銀座三重奏」

「銀座の柳」「秋の銀座」「銀座八丁」などをあげることができる。しかし、都市住民の日常的レジャーの場としての盛り場つまりは第三の生活空間の典型として、より重要な意味をもっていたのは、都心のオフィス街と私鉄沿線の郊外住宅地との結節点に位置するターミナル型の盛り場であったと言ってよい。

東京では新宿（小田急、京王）、渋谷（東急）、池袋（西武）、大阪では梅田（阪急）に代表されるターミナル型の盛り場が発展をはじめめるのは、大正末から昭和の初めにかけてのことだった。そして高度成長以降の時期、浅草や千日前といった近世的原理の上に成立した盛り場が衰退をしていくのとは対照的に（信仰と性と興行の三位一体の構造原理がくずれたのが、衰退の最大の理由であると考えられる。表1を参照）、これが現代都市を代表する盛り場として飛躍的な発展をとげていくことになる。

このターミナル型盛り場を特徴づけるのは、私鉄資本の経営するデパートメント・ストアを中心核として、その空間構造が組み立てられているという所にあった。その祖型となったのは、加藤秀俊が指摘しているように（『都市と娯楽』）小林一三ひきいる阪急電鉄の経営戦略であった。阪急は、池田室町住宅地（一九一〇年）、桜井住宅地（二一年）をふりだしに、自線の沿線に

つぎつぎとサラリーマン層のための郊外住宅地の開発・分譲を行っていった。それと平行して都心側のターミナル梅田に阪急デパートを開店し、逆に都心とは反対側に宝塚遊園地（あの宝塚少女歌劇の本拠となる劇場もこの遊園地内に設置された）を設けて、平日の朝と夕方の時間帯は都心のオフィス街へ通勤するサラリーマン、平日の昼間はデパートへ買物に行く主婦たち、そして休日は家族連れで遊園地へというように、四六時中乗客がとぎれることのないような方策をとっていった。

この阪急の経営戦略が、他の私鉄資本にも踏襲されて、やがては私鉄資本はサービス産業の巨大なコングロマリットへと成長し、そして「私鉄文化」と呼ばれるような日本固有の都市文化を形成していくことになるのである。ここに、公共的政策を中心にして発展していった欧米の都市とは異なる日本の近代都市の特質が存

在している。

さて話をもう一度、ターミナル型の盛り場の中心核となる私鉄系のデパートのことにもどすと、これはつぎの二つの点でユニークな存在となっている。デパートの比較文化論のような話になるが、ひとつは「およそ世界中で百貨店と名のつくところで、お野菜だのお魚だのお肉だの、といった生鮮食品を売っているのは日本だけなんです」（加藤秀俊『東京の社会学』）というように、ターミナル型のデパートが、沿線の主婦層を中心的なターゲットにした日常的な買い物の場という性格をもったものとして発展していったことである。いま一つは、これも他の国々には見られないことだが、デパートの内部に食堂、美術展などの開催される催しもの場、劇場、そして屋上には小型の遊園地などの各種施設を設置して、たんなる大型買い物店という商業的機能をもった施設という以上の総合的機能を有する施設としていったことである。このような意味では、ターミナル型デパートは、盛り場の中の盛り場という性格をもつものとして発展していくことになる。

こうして、以上のような特徴をもったデパートを中心核としてターミナル型の盛り場が構成されていったという事実は、そこからかつての盛り場のもっていた異界性、周縁性が喪われて

表-1 盛り場・浅草の空間構造

興行	性		信仰	江戸末期	大正中期	高度成長以降
	猿蓑町歌舞伎 三座 奥山の大道芸 見世物	吉原遊廓 十二階私娼窟	浅草寺			
浅草オペラ	六区 活動写真 映画入場者数ピーク (六区の衰退)	吉原遊廓 昭和33年 売春防止法実施	浅草寺			

いったということに興味している。あるいは裏返して言えば、それが都市住民の日常的な生活構造のうちに組みこまれ、都市のなかでの「中心性」を獲得することになっていくのである。

#### 四——「銀ブラ」の魅力—匿名性と群れの本能

さて、盛り場を機能という面からみれば、それは、都市住民の多様な欲望に対応した複数の異なる機能空間の複合体とでも規定することができる。たとえば服部錠二郎は「盛り場——人間欲望の原点」のなかで、現代の盛り場を構成している基本的機能を、①文化的機能（市民ホール・美術館・各種学校・市民大学などの施設）、②商業的機能（デパート・スーパー・専門店・各店・商業まつりなど）、③外食的機能（レストラン・食堂・料理店・割烹・スナックなど）、④社交的機能（会館・ホテル・クラブ・喫茶店など）、⑤レジャー的機能（映画館・劇場・寄席・パチンコ・ゲームセンターなど）、⑥性的享楽機能（ラブホテル・ソープランド・ストリップ劇場など）というように分類している。以上のような機能をもった各種の施設が集積し、異なる機能空間が複合することによって、盛り場は、老若男女を問わず、職業を問わず、様々の階層の人々を同時に吸引することが可能となる。

みる、きく楽しみ、飲み、打ち、食べる楽しみ：人間のもつ各種の根源的欲望にこたえられる場であることが、何故多くの人々が盛り場に群れつどってくるのか、に対するひとつの説明にはなる。

しかし、盛り場には、このような機能的理由をこえたもう少し深層的な魅力というものがあるようである。それを考えようという時に、「銀ブラ」という言葉が貴重な示唆を与えてくれる。もちろん買い物という目的で、飲食の目的で、あるいは観劇という目的をもって銀座へやってくる人も多かっただろうが、しかし「銀ブラ」という言葉が指示していたのは、まずなによりもとりたててなんの目的もたずに街頭をそぞろ歩くということであったということである。

ルイス・マンフォードが「都市にはまず容器より先に磁力があったのである」（『都市と文明』）と言っているように、あるいは池井望が「人は文字通り『人ごみに酔う』ために盛り場にやってくる」（『盛り場行動論——空間と娯楽』仲村祥一編『現代娯楽の構造』）と言っているように、群衆の存在そのものが、そして群衆が意識的にあるいは無意識のうちに演じているパフォーマン스에、自分も匿名の群衆の一人として参加していきうるといふことこそが、盛

り場に人々を引きつける根源的な理由なのではなからうかということなのだ。

現実とはともかく理念的に言えば、確かに、人は盛り場では匿名の群衆の一人となりうる。第一の生活空間では、人は〇〇会社の〇〇部の部長だとか××会社の××課の課長だとかいうように、企業組織の中での特定の地位と役割を、そして第二の生活空間でも、たとえば家族のなかでの夫としての、父としての地位と役割とを分けもっている。これに対して、第三の生活空間である盛り場では、人は匿名の存在として、自己を縛りつけている地位と役割の体系、そしてそれと分かちがたく結びついている社会の規範力から一時的にせよさまよい出ることができ。家族の、あるいは職場の、ときにはわずらわしく思われる人間関係から一時的に離脱して、通俗的な言いまわしとなるが、人は「群衆の中の孤独」となりうるのだ。

これまた通俗的な言葉だが、「都市は人を自由にする」そして「盛り場は都市の中の都市である」というよく耳にする文句も、盛り場のもっているこの匿名性の原理にもとづいたものであると理解することができる。そしてこの点こそ、「銀ブラ」という言葉が、農村にはない都市生活固有の魅力を象徴するものとして、人々の心をとらえていった最も大きな理由があるよ

うに思われる。

盛り場のいま一つの魅力の源泉は、「人ごみに酔う」とか「雑踏こそ盛り場の魅力」という言葉があるように、ヒトは群れつどうことに陶酔感を感じるというその集合本能にかかわっている。つまり、人々の多様な欲望を充足させる施設が集積しているという以上に（もちろんそのことが雑踏をうみ出す基本的条件であることも事実だが）、そこに雑踏という人々の集合が存在していること自体が、盛り場の吸引力となるのである。

私たちの経験からしても、たとえばクリスマス・セールの時のデパートで、人ごみにミックチャにされ予定どおりの買い物もできなくて、くたくたになって家に帰ってきたとしても、のどもとすざれば何とやらでまた同じような結果になることがわかっていても、こんだデパートへ出かけていってしまうという行動をくり返しているのではなからうか。そこには、買い物という目的と同時に、どこかに群衆の中にまじりあいたいという無意識の欲望が働いているというように言うことができるのかもしれない。そして、このことが「銀ブラ」に含意されている「なんの目的ももたずに」ということとつながりあっているのである。

## 五——「銀ブラ」の調べ物—考現学という方法

ところで、この「銀ブラ」で賑わう関東大震災後の銀座の地で、考現学と呼ばれる新しい学問が呱呱の声をあげた。それは、日本における民家研究の草分けで、生活の多様な側面に幅広い関心をもち続けた今和次郎（こんわじろう）とその仲間が、その頃急激な変化を見せはじめていた都市の生活風俗を観察・記録しようとして産み出した国産の学問、日本人の「自己認識」のための学問であった。その最初の調べ物が、「銀ブラ」族を対象として行われた（「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録」）。

これは、たとえば商店のウィンドーをのぞく人の割合とか、女性の歩き方といった「銀ブラ」族の行動に関心をよせると同時に、図1からもわかるように、かれらの身にまわっているもの一切を、頭のテッペン（帽子、髪形）から足のつま先（靴、下駄、草履）まで徹底的に調べあげ、それを図示し、分類することによって、現代風俗の最先端を把握しようとするものだった。つづいて同じような方法でもって、中小、零細工場と都市スラムとが混在する本所・深川（「本所・深川貧民窟附近風俗採集」二五年）の、そしてサラリーマンの郊外住宅地として発展しはじめていた高円寺（「郊外風俗雑景」二六年）

の街頭風俗が調べられていった。

そして、二七年十月に新宿の紀伊国屋書店で開かれた「しらべもの展覧会」において、今はずぎのような宣言を行っている。「この展覧会は、ここ三年間私達のやった仕事の展示です。かかる仕事を私達は考現学と称して、考古学でやる方法を現代に適用してみているのです。即ち現在眼前に見るいろいろなものを記録し、その調べの方法をどうやったらいいかに就いて努めている次第です」と。

このように、考現学は急激に変化していく現代生活の調べものの方法として、まずは考古学との対比の中で構想されていった。考古学が、まだ文字をもたない歴史以前の社会と生活を、遺跡・遺物といったモノの調査をつうじて明らかにしていこうとするものであるのに対して、考現学は、新しすぎてまだ文字に記録されることのない現在ただいまを、「眼前に見るいろいろなもの」、つまり人々の行動や使用しているモノをつうじて解明しようということと誕生したのである。そして、それは銀座調査に見られるように、とてもユニークな盛り場研究の方法だと言ってもよい。

この考現学が、いま再び、盛り場の調べものの方法として大きな脚光を浴びている。今を中心にして創設された日中生活学会が、巣鴨のと

げぬき地蔵で行った考現学調査（川添登編著『おばあちゃんの原宿—巣鴨とげぬき地蔵の考現学』）、路上観察学会の一連の調べもの、そして博報堂生活総合研究所のタウンウォッチング：これらはいずれも今の考現学の方法を受けついでものである。現在起こりつつある社会の大きな変化が、再び私たちに「自己認識」の必要性を課しているのかもしれない。

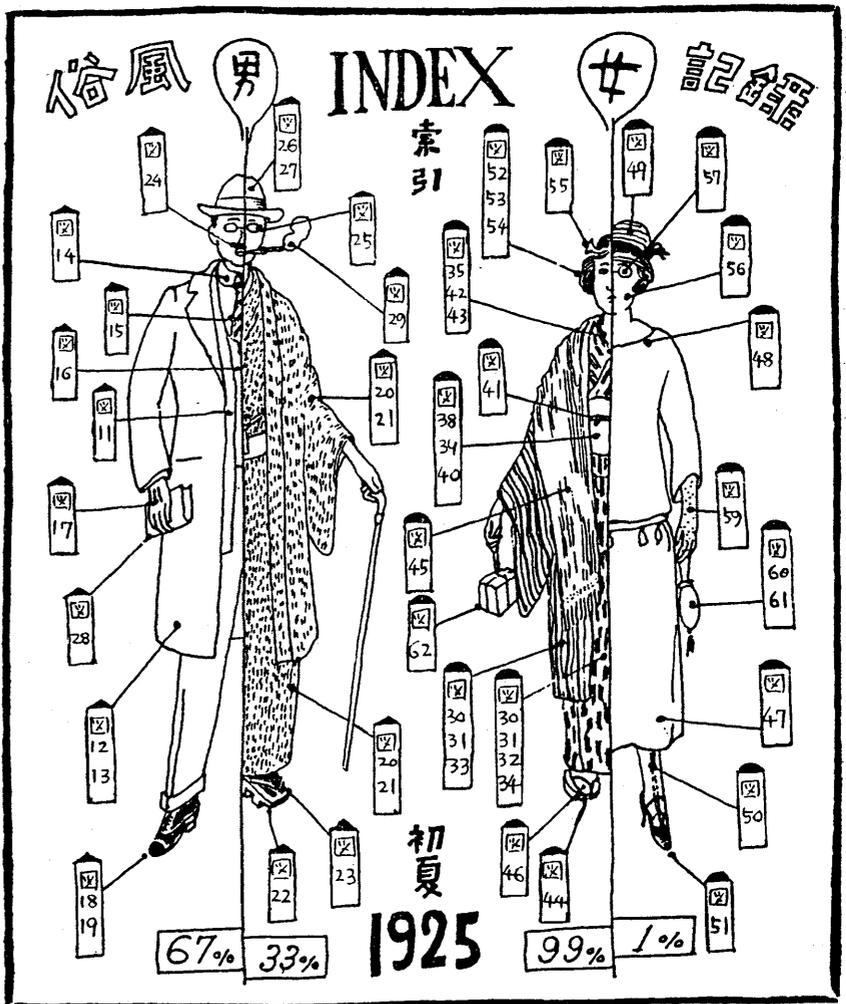
そして、そのことは一人一人の生活者にとっての課題にはかならない。そこでここでは巣鴨調査に参加した経験にもとづいて、ぼくがある市民グループのために作成した考現学調査の方法マニュアルの概要を紹介することで、この小稿のまとめにしたいと思う。

① 社会地図の作成

第一の方法は社会地図の作成である。盛り場を構成する各種の施設、ここでは商店を例にあげればその業態・店構え・店名・看板などを地図の上に書きあげていってみることによって、その空間の生態を把握してみようという方法である。ここから、盛り場の発展の歴史や現在の空間的特徴がわかる。

演劇にたとえて言えば、大道具や小道具などの舞台を色彩する装置群について調べてみようということである。

図-1 「1925年初夏東京銀座街風俗記録」の調査項目



② 通行人調べ

第二の方法は「通行人調べ」である。盛り場に集まってくる人々の性別、年齢さらにはその服装を調べることによって、盛り場という舞台の上に登場してくる「俳優たち」の特徴をつかまえてみようという方法である。

ここでは徹底した統計的観察が要求される。

一つのエピソードを紹介しておこう。今和次郎が銀座調査を行った当時、人々の印象では銀座は最新ファッションである洋服を身にまとったモダン人種の街だと考えられていた。ところが徹底した統計的観察を行った結果は、図1にも示されているように大人の女性で洋服着用者はわずかに1%、ちょっと見の印象とは全く異なる

る結果がでてきたのだ。このように印象にもとづく事実認識のあやうさから逃れるためにも徹底した統計的観察が必要なのである。

### ③ 定点観測

第三の方法は「定点観測」。その盛り場の特色がよく現れている特定のポイントで、そこでの人々の様子や行動を把握してみようという方法である。同一ポイントで時間をあけてこの定点観測をくり返して行っていけば、時間の経過にともなう人々の様子や行動の変化がわかってくる。

### ④ 行動追跡

第四の方法は「行動追跡」。ある特定の人やグループが、その盛り場でのような行動をしているのかを徹底的に追跡して行ってみようという方法である。この調査の担当者は、いわば犯罪者を尾行する探偵となる。

定点観測がある特定の場所に集まってくる人々の行動を調べようとするものであるのに対して、追跡調査はある特定の人がある特定の境界でどのような行動をしているのかをみようとするのである。この第三と第四の方法をまた演劇にたとえれば、舞台上に登場した俳優たち（「通行人調べ」）

が、いかなる大道具を背景に、いかなる小道具を用いて（「社会地図」）、どのような演技を見せてくれるのか、その「演技」を調べようというものだと言つてよい。

考現学の方法がこの四つにかぎられるわけではないが、すくなくともこの四つの方法を総合的に実施していけば、第三の生活空間における私たち自身の姿がまぢがいなく浮かび上がってくるはずである。

以下に、この四つの調べものの方法の具体的なマニュアルを提示していく。そして、それぞれの調べものの結果がどのような形でまとめられるのかを理解してもらうための一例として、『おばあちゃん原宿』の中の図をあわせて紹介しておく。

巣鴨のとげぬき地蔵は、四の日の縁日の時には、自分あるいは家族の健康を祈願しようとしてやってくる多数の参詣人にぎわう。その大半はおばあちゃんたちで、彼女たちはお地蔵さんにお詣りすると同時に、その境界にずらりと並んだお店や露店で買物をしたり、飲み喰いをしたりして、縁日の一日を楽しんでいる。この「おばあちゃん原宿」と呼ばれる高齢化社会の盛り場をフィールドにして行われた考現学調査の中心になったのが、社会地図、通行人調べ、

定点観測、行動追跡の四つの方法だった。ここでは、それぞれの方法の成果がともよく現れていると思われる四つの図をあげておく。一つ一つについては説明しないが、マニュアルと照らしあわせながら、じっくりと見ていただきたい。

なお、すでに述べたように、このマニュアルを用いて、いくつもの市民あるいは学生のグループが、自分たちの住んでいる地域をフィールドに、あるいは自分たちのよく遊んでいる盛り場をフィールドに、考現学調査を実施している。これは、間違いなく調査のアマチュアでもできる調べものの方法なのである。

大事なことは、激しい社会変化のつづく現代という時代においては、一人一人の生活者が自分の眼で自分の生活を見つめていく方法を身につけていくことだ。そのことが、社会の大きな動きに流されることのない、揺ぎない私の拠点を作り出していくための出発点になる。考現学は、そのための学問の方法のひとつなのだ。

市民たち自身による考現学の試みが拡がっていくことを期待して、ここに紹介させてもらった次第である。

①社会地図

〔準備するもの〕

- ① 調査エリアの白地図（住宅地図など、建物の敷地が正確に描かれたものをコピーし、店名や居住者名などの文字を消して使用するとよい）。
- ② 下敷、③ 赤色ボールペン（白地図に調べものの結果を記入していくためのもの）④ カメラ

〔調査の項目〕

- ① 調査範囲の建物のすべてについて、以下の調査項目を白地図に記入する。

a、商店の名前および業態、b、建物の様式（何階建てか、洋風様式かなど）、c、ちょっと変わっていると思った店については、店構えや看板などのイラストで描いたり、写真にとっておく。

② 客の多く集まっているお店では、そこで取りあつかっている商品について、以下の項目を記録する。

a、どのような商品が並べられているか（商品名と値段：たとえば飲食店だったらメニュー一覧を記録しておく）。b、ディスプレイ（商品の並べ方）や売り文句（はり紙のキャッチフレーズなど）。c、通りに出ている露店について、①、②のa、bと同じように、露店の業態・形態・取りあつかっている商品・呼びこみの仕方などを記録する。d、以上の観察を記録とを行っ

ていて気のついたことや印象などをメモしておく。

〔調査上の注意点〕

① 目で見たものをできるだけ正確に記録する。勝手な解釈や価値判断で取捨選択をしない。考現学調査の第一のポイントは

「正確な記録」につとめる。

冷徹な記録者であってこそ、それぞれの調べものをつきあわせた時、街の現実が浮かび上がってくる。

② 何枚かの白地図を用意しておいて、調査項目ごとに情報を別の白地図に記入する。

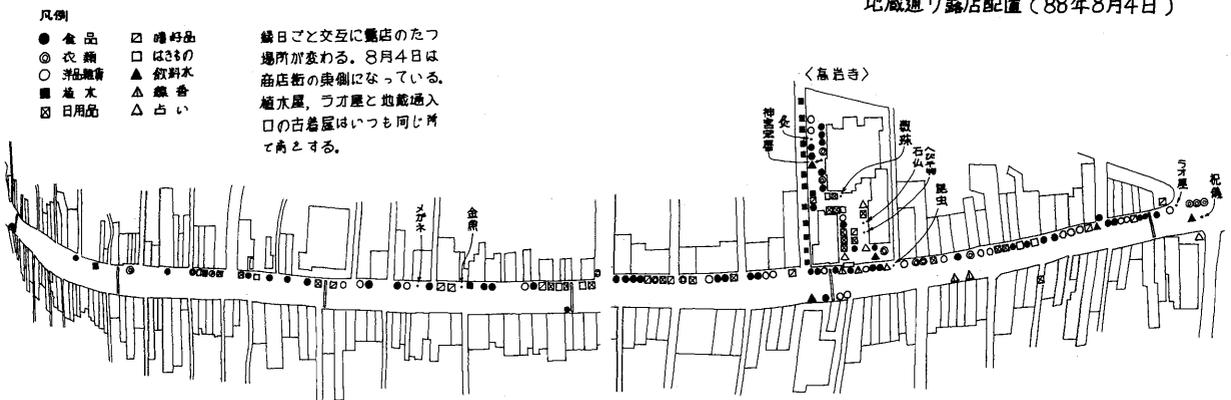
② 通行人調べ

〔準備するもの〕

① 記録用紙（たとえば別表のようなワックシートを準備しておくときよい）② 筆記用具・下敷③ カメラ  
〔調査地点の選定〕  
調査地点を決める。盛

図-2 露店の社会地図

地蔵通り露店配置（'88年8月4日）



（出典）川添登 編著『おばあちゃんの原宿 - 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』

● 通行人調査記録用紙 (年齢・性別欄)

: 9月14日 (土) 時 分 ~ 時 分 分間  
 : 調査者氏名 ( ) ( ) ( )

性	年齢	通行人数(「正」で字でチェック)	小計	性別集計
女	幼児			
	こども (小・中学生)			
	若者(高校生 以上、20代)			
	中年 (30代以上)			
	高齢者			
男	幼児			
	こども (小・中学生)			
	若者(高校生 以上、20代)			
	中年 (30代以上)			
	高齢者			

図 - 3 通行人調査の一例

**調査結果** 「行き」と「帰る」、合計  
 43コマの写真シーンの集計  
 結果によると、おばあちゃん  
 の数は451名中177  
 名(40%)であった。

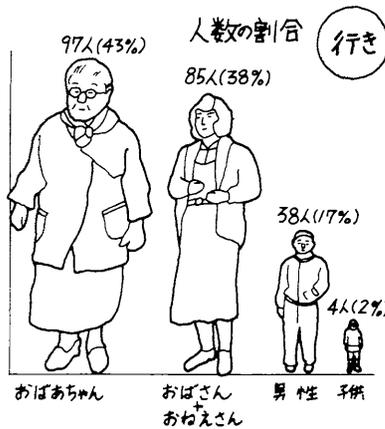
おばあちゃんはどれくらいいるか

**調査日** 昭和62年3月4日(土) 縁日  
**場所** 北海道拓殖銀行前信号  
**調査方法** 信号待ちをしている群衆を撮影する。  
 最前列の人たちの中から「おばあちゃん」  
 を判別し、その数を集計する。  
 おばあちゃんの服装の類型分析もした。

● 信号待ち 午前11時~12時



おばあちゃん 7人 おばあさん 1人 男性 1人  
 おねえさん



合計人数 224名

り場の場合は、通行人の流れがよく見渡せる場所、たとえばその盛り場への「入り口」となっている場所を調査地点にするとよい。

〔調査の項目〕

- ① 通行人の属性について、以下の調査項目を記録する。
  - a、調査地点を通る通行人の性別・年齢・年齢はひとまず「幼児」「こども(小・中学生)」「高校生以上の若者」「中年」「高齢者」ぐらいの区分を設け、おおよその推測でカウントしていく。
  - b、連れの構成。「一人」「二人」「三人以上のグループ」「家族づれ」など、どのような構成で歩いているかを調べる。
- ② 通行人の服装や持ち物を調べる。
  - a、服装では、上衣、下衣、はきものなどについて

て、それぞれにどのようなものを身につけているかを詳しく記録する。

b、服装や持ち物調べでは、カメラやビデオも威力を発揮するので、現場での観察と併用するとよい。

〔調査上の注意点〕

- ① 一回の調査時間を統一しておき、調査開始時間と終了時間を必ず記入する。こうしておくと、時間帯をずらして調査した時の比較ができる。

(出典) 図 - 2 と同じ



